

## 監督論

小西得郎さんは、昭和 30 年頃に「なんと申しましょうか」という独特のイントネーションでラジオ・テレビの野球解説で一世を風靡した人である。子供らまでもが真似をしたものである。この表現を使うようになったのは、あるときピッチャーの投げた内角をえぐるような速球が打者の股間に当たって悶絶したことからである。このとき、解説をしていた小西さんは、「キの字まで出たんですが、ンの字を咄嗟に呑み込みまして、なんとうししましょうか、この痛さはご婦人方にはおわかりにならないでしょう」と言ったのが最初だと自ら語っておられた。

この小西さんは、昭和 20 年代に松竹ロビンスの監督をしておられたのだが、あるとき、記者に「どのような選手を使いたいですか？」・・即座に答えた言葉。「大きい方をしたとき、紙で拭くまでもない、文字通りフン切りのいい選手」と語った。

プロ野球の生き字引のような存在で、どのピッチャーがもっとも速い球を投げるか？と話題になったとき、沢村栄治やスタルヒン、のちの山口高志や尾崎らの名前が上がったとき、「やっぱり金田くんが一番速かったんじゃないの？」その場で直接これを聞いた金田(正一。400 勝投手)が大喜びした。

選手を殴って教えるというのは、星野らしいが、相手もプロだから自分の生活のためにも殴られなければ動かない、というのは間違っている。桜ノ宮高校で、生徒を相手に 20 数発殴った監督がいるらしいが、よくまあ、それだけの数を殴れるものだ。余程に憎かったとしても、そこまでの執念を燃やすというのは、ある意味、偏執狂ではないか。狂っているとしか思えないのであるが。さらには、子供剣道教室で自分の機嫌で、年端もいかない子供を足蹴にかけたりしたのがいて、「もう辞めているから」と不問にした経緯があるらしい。これなど、傷害罪を適用してもいいと思う。

高校野球でも、甲子園では監督が殴ったりしたら、出場停止である。陰では知らないが。

プロ野球でもっとも成績のいい監督は、川上哲治ということになっているらしいが、最優秀かどうか異論有りです。

なぜなら、イチローが出現するまで、プロ野球界で最高の打者は 3 人いる。長嶋、王、張本である。川上の時代に、このうちの 2 人を抱えていた。さらに金満球団だから、金にあかしてすべての球団からトップレベルの選手を集める。長嶋・王が飛車角とすれば、金銀桂馬、香車などに該

当するあらゆる選手をいずれも複数抱えていたから、他球団と比べれば、段違いの攻撃陣であり、守備にいたっても当時では最高のレベルの選手の集団であった。だから、誰が監督であってもV9は可能であったはずである。

これを考えると、どこの球団とは書きにくいですが、人気はあるが歩(ヒョコ)ばかりのチームがある。まれに村山や江夏のような飛車角があらわれるが、監督の無能さのため十分いかされていなかった。そら負けるのが当然ではある。たとえば、堀内という投手がいたが、よれよれで200勝投手になった。長嶋が最初の監督になったとき、出ると打たれの連続であった。勝てたのはすべて攻撃陣のおかげである。いつか、巨人の監督までしたが、三宅久之先生によれば、「あれは疫病神ですよ」と烙印をおされている。広島カープの長谷川の197勝などのほうがはるかに価値のある記録である。350勝の米田や320勝の小山など、巨人に在籍していたなら、400勝も確率の高い話になっただろう。

名選手必ずしも名監督ならず、というが、長嶋や王は、監督としては二流以下である。一流と呼べる監督は、人格はともかく、野村、西本、仰木。あと書き落としているかも知れない。

監督ほど結果を要求される仕事も少ないだろう。シーズン終了時点では誅首されることがわかってきたなら(まあ、雰囲気ですれとわかるけれど)、選手は監督の言うことを聞かない。どこだったか、農人監督のとき、破れかぶれになって選手が見たこともないサインがでた。あとで尋ねると「あのホームランのサインがわからないか！」と言ったという。末期には人格が現れる。

中西太が面白かった。阪神の監督のときには、ケチョンケチョンに言われておちこんでいて、采配に精彩を欠いていた。ところが、解説者になった途端に、次は何、次は何、というのがすべてあたるのである。ひとつやふたつではない。「悉く」といっていいほどあてるのである。するとアナウンサーが意地悪な質問をする。「それだけあたるなら、監督のときになぜ勝てなかったのでしょうか？」もっともな質問なのだが、要するに責任をとる立場になると、急に気が小さくなって、選手を信用できなくなるのである。「立場が異なりますから・・・」と抵抗はしたけれども。

監督の醍醐味は、人事権を握っていることである。どの選手を使い、また干すことも可能である。それで一生を左右される選手の方に見ればたまったものではない。

プロ野球の話ばかりになってしまったが、サッカーにおいても同様のことが当然ながらある。ワールドカップごとに監督が代わる。もっとも失望したのがジーコである。やっつけ仕事みたいなものだった。選手の選び方、戦略・戦術ともに並以下だった。日本人の岡某にいたっては、今「名監督」と評価されているけれど、2つの点で、ぼくは信用していない。ひとつは、初めてワールドカッ

プに出場できたとき、三浦知良選手をはずしたこと。J-リーグが現在のように隆盛を極めているのは、三浦を措いて考えられない。事実上 J-リーグをつくったのは、野球における沢村栄治とおなじく、三浦である。そのことをまったく理解していない。

まだある。次のワールドカップでは、一軍と二軍とにわけて試合をすれば、いつも二軍が勝った。・・・つまり、選手の能力を見極めることができなかつたのである。批判を覚悟の(つまり二度と桧舞台にでられなくなる)「破れかぶれ」で二軍選手をスタートメンバーにしたところ、日本としてはかなりいい成績を残したのである。それをあたかも初めからわかっていたように振舞いよる。大嫌いな監督である。

監督冥利に尽きるのは、采配が的を射るように成功することである。ザッケローニの得意のところで書いた。このザッケローニでさえ、少し負けがこむと更迭が噂されるようになる。日本サッカー連盟に腰を据えて監督を選ぶ姿勢が欠けているのである。現在の日本のチーム力の判断ができているのである。チーム全体のみならず、選手個々の能力の把握もあやふやなものである。

マンチェスターユナイテッド(マン-U)の香川が、監督が変わったら、出場機会が激減した。この監督の手腕が秀でていたなら納得できるかも知れないが、前年度は同じメンバーで優勝している。この文章を書いた時には、結構負けがこんでいるのに香川の出場機会はなかった。頑なに香川を使わなかった。この文章を書いているとき、「負けるな！腐るな！監督の方が先に更迭される可能性の方が高い」と思っていた。ところが、この3月4月にかけて、あきらかに香川が重要視されるようになった。それまでにも、香川が交代したあと、香川のいた守備位置から相手に崩されて得点をとられていたり、監督の判断力が悪いのだ。つまりは香川の能力が過小評価されていたことである。能力どおりに評価していれば、ここまでマン-Uも負けがこむことはなかったのではないか。この監督の選手の能力の評価が間違っているのだ。並以下の監督ではある。

それにしても、香川のスピードがはるかに豊かになり、一段レベルアップしたように思うのだが。